

日本比較文学会東京支部 1 月例会

氏名・所属：中丸禎子（東京理科大学）

題目：絵を描くムーミンママ——トーベ・ヤンソン『パパと海』とヴァージニア・ウルフ『灯台へ』における女性の自己表現

発表要旨：

フィンランドのスウェーデン語作家トーベ・ヤンソン（1914–2001）は、「ムーミン」シリーズを、風刺画・小説（文章と挿絵）・新聞連載漫画・舞台作品（脚本・大道具・衣装デザイン）・アニメ（監修）・立体創作物など多様な形式で発表した。生誕 100 年を迎えた 2014 年には、二冊の伝記翻訳を含む関連書籍の刊行、文芸・美術・ファッションなど幅広いジャンルの雑誌での特集、二つの展覧会の開催、ドキュメンタリー映画の日本初公開・DVD 化、各企業とのタイアップ商品の販売など、大々的かつ多分野での紹介もしくは再評価が行われ、ヤンソンの創作活動のクロスジャンル性が浮き彫りになった。文学研究の分野では、内外の伝記的研究により、バイセクシュアルであったヤンソンの交友関係や家族との葛藤、画家としての側面、「ムーミン」以降の小説など、これまで言及の少なかった面に光が当たった。一方、北欧文学史への位置づけや、他の作家・作品との比較研究は限定的であった。

本発表では、伝記的研究の成果を踏まえつつ、比較文学研究の立場から、小説版「ムーミン」シリーズ第 8 作『パパと海』（Pappan och havet, 1965／邦訳：小野寺百合子訳『ムーミンパパ海へ行く』）を、ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』（To the Lighthouse, 1927）と比較する。1945 年から 70 年までの四半世紀にわたって全 9 作が刊行されたシリーズにおいて、初期にはムーミン一家は仲の良い家族、ムーミン谷は一家と友人たちの親密なコミュニティとして描かれる。その中心を担うのが、理想的な主婦ムーミンママだ。モデルとなったヤンソンの母は、結婚に際して彫刻家になる夢を諦め、商業画家として一家の生計を支えると同時に、家事労働をすべて担っていた。『パパと海』において、一家でムーミン谷を去り絶海の孤島に移住すると、ムーミンママは家事を放棄し、絵を描き始める。自己表現・自己実現を求めて模索するムーミンママを、ヤンソンの母、そして、画家としては大成しなかったヤンソン自身の姿に重ねつつ、『灯台へ』の主婦ラムジー夫人および独身の女性画家リリー・ブリスコウと比較する。